

# 「我が人生思い残すことなし」(前編)

きたごう はると  
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ—— 戦時中神戸で昭男は、母きみと空襲に遭った。子供らの先行きを案じたきみは、自らの実家である広い島への疎開を決めたが、昭男は1人神戸に残ることを選んだ。数日後きみは弟妹を連れ旅立って行った。——

## 4. 上陸

きみと弟妹達は、一晩かけて広島駅へたどり着いた。汽車の中は同じ様な母子の疎開者でのりかえり、座りきれない人達は通路やアツキに傾いたり、ていじも場所がよく朝まで立つままの人までいた。

きみは下の3人の弟妹達を2人掛りのシートにほんこが座らせるしこが出米にか、日方高子は床に置いた荷物の上に腰掛けたまま足を伸ばす事すら出来なかった。

広島は、早瀬や飛行場がめるといり人通りも多く活気付いていた。入りに空襲を受け形跡もなく、きれいな建物が並んでいた。青く澄み渡つた空を見上げ、きみは久しぶり故郷の空気を大きく吸った。「さめ、はめづやんこしまじ限張つて行くじ。しつかりさや」そう子供達に声を掛けると先頭を切って歩き出した。

きみが行く広島県安佐村は、広島駅から北へ約12キロ、山中を分け入った先にあった。よつやく実家に着いた頃には9時に陽は西に傾き、子供らはハトハトにぶついていた。出迎えてくれたのは、先に来ていたきみの兄弟の子供達ばかりで、大人達は皆まだ畑に出ている様につた。「さめ、早く手伝いに行くじ。」きみは、てつ高子に促がられ、おとなしく「いとこ」達と留守番する様に言い付け、荷物を玄関に置くとすぐに畑に向った。



『お母ちゃんらどうしてるかなー？今頃高子らは、新学年が始まって、向しつの子供じつやんこやつてるかなー？』昭男は淋しさを覚えしは広島

行った皆んなの事を想った。

昭和20年4月に入って戦況はますます悪化していたが、その事を知る唯一のフンガーユースはいつせ「苦戦」を伝えしいた。「大丈夫。持ちしえいる・・・。」昭男は日方に言い聞かす様にフンガーに耳を傾けしいた

確かにこのところ大きな空襲はこの辺りでは起こっていない。『このまま何とか7月に満15歳になるのを待って早く軍隊に志願して戦地で

闘いたい。昭男が考えしいるのはににていりにつた。にがら、本ヨばつしり3月に国氏子供

卒業し、働き先も決めてないといけなのだが近所を回っては手間仕事をもらって、日銭を稼ご、ていじも之しくばいば、店屋の残飯や、虫や小魚、垣端の野草を采めしは良いノは

その日、その日をなんとか生き延びていた。

しかし現実はずし昭男が知つしいる通りじはなかつた「9時に木早は沖縄に上陸しにらしいじ・・・。」「てやがてつりに王部戦刀が付つしもうし最近に空襲がめまり米ないや・・・。」「いよいよ本工決戦！」「億玉碎や！！」こしが

ともなく、そんな声が耳に入つて来た。『まさか・・・、そんなはずはない・・・。もしかしたら、間に合わへん・・・。このままやこつたれ死ぬしこになる・・・。』ていは昭男が一番恐ろししいる結

だった。昭男は焦りや不安をかき消す様に木刀を振り続けた。『日本は神国や。神の国や。負けるはずがない！この戦争は大東亜解放の闘いや。俺らは間違つてへん。最後には絶対に勝つ！！』そう念じながら・・・。



(つづく)